
東方幻想記

明星の光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想記

【Nコード】

N89010

【作者名】

明星の光

【あらすじ】

平凡な日常に嫌気がさしていた田口^{たぐち}耕作^{こうさく}は、ある日、夢を不思議な夢を見た…翌日、家を出て歩いて行くが気がつく^{きがつく}と森の中に入り込んでしまっていたことがわかった…そして -

第零話 序幕（前書き）

先日、予約投稿したこの小説ですが、長編なのに短編小説として投稿してしまったことがある方のおかげで判明したので削除し、投稿しなおしました。

教えてくれた方、ありがとうございます。

m (| |) m

ちなみに、サブタイトルの『第零話』というのはプロローグという意味で使いました。

そして、ペルソナ3FFが終わってない件について…

現在は、一人一人が二体のシャドウを相手にするところなんです。あるキャラクター1匹とシャドウ2体は無茶ということがわかったので、書き直しています。

m (| |) m スミマセン

第零話 序幕

俺の存在する意味って何だろう… -

俺・田口 耕作は、たまに、そんなことを思うことがある…。

困っている人を助けたりという良いことをしても、自分には何にも良いことは起きない…寧ろ、日が経つにつれて家での居場所は無くなっていく…。

そんな不条理な日常が、自分は次第に嫌いになっていた。

今日も、いつも通りに学校へ行き、6時間の授業時間のうち睡眠を何分か取って家に帰ってくる…。

玄関の扉を開け、靴を脱ぎ、居間に入ると、双子の弟たちがゲームをして遊んでいた。

だが、よく見ると、ゲームに失敗した三男はすぐに、次男に代わっていたが、次男がゲームで失敗するとすぐに『やり直す』という動作を7回ほど繰り返していた。

(…それ、次男としてダメだろ…。)

そう思ったが、どうせすぐに逆ギレして面倒くさい事になるから、放置しておいた…。

着ていた制服から寝間着に着替え、飯を食い、風呂に入り、その後は友達とメールでやりとりをする筈だったが、1週間前から音信不通になっていたので仕方なく布団に入る…。まだ、10時だというのに眠くなってきた…。

いつもの自分なら、1時ぐらいまでは余裕で起きていられるはずだった…。そして俺の意識は、眠りの世界へ溶け込んでいった…。

『……………ない…。』

どこからか声が聞こえてくる。

『…う…よ…なさ。』

（誰だ？何て言ってるんだ？）

『平凡で不条理な日常を嫌う者よ…め…さ…い！』

神経を研ぎ澄まし、聞こえてくる声に耳を傾けるが、最後の部分が聞き取りにくい…。

『目覚めなさい！』

その声にハッと、目を覚ました…。時計を見てみると、午前5時37分だった。

（あの夢は…何だったんだ？）

だが、所詮は夢と思い、それ以上、夢のことは考えないようにし…二度寝をした。

今日から冬休み…心配することは今のところ、何一つとして無い…。
…今のところは…。

第零話 序幕（後書き）

ふう…疲れた…（修正が）

何とか、しないとなー…（色々と）

第壱話 神隠しの全貌（前書き）

まあ、お詫び的な意味で2話を連続して投稿。

後悔はしない…サブタイトルについて後悔は若干、してる…

第壱話 神隠しの全貌

…起きたのは、土曜日の9時30分だった。

親は仕事に出掛け、弟たちはパソコンを使っていた…そんないつも通りな事が自分にとっては腹が立った。

（どうせここにいても、つまらないだけだし…飯食ってどこかへ行こう。）

タンスから自分が、夏でも冬でも気に入って着ていた私服を取り出して着替えた。

外は、雪が少し積もっていたが自転車の運転には支障は無い程度だった。

（さてと、どこに行くかな…）

久しぶりに、中学校

あえて、図書館

考えるの面倒になった

↓故に、適当に…

（そういや、いつもならメール送ったら面白いテンションで返事し

てくれるのに、一昨日から返信が来ない…どうしたんだろ…美愛那^{みいな}）

飛竜院^{ひりゅういん} 美愛那^{みいな} -

初めて会ったのは、中学1年生の頃だった。転校してきた彼女に、俺は一目惚れをした。

だが、彼女は中学を卒業後に県外に引越してしまった…。

その前に告白をしたが、転校するという事を知った後だったから、玉砕した。

（久しぶりに思い出したら、恥ずかしくなってきた…。）

そう思って周りを見ると、無意識のうちに林に入っていた…。

「うお！？いつの間に、林に入ったんだ？俺は…。」

驚きのあまり、心の声が口に出てしまった…。

とりあえず帰ろうと、90度回れ右をした瞬間 -

『待ちなさい』

(……………っ！？今の声は…)

夢の中で聞こえた声だった。

「俺も頭がパアになったんかな…幻聴は不味いだろ…。」

と、言った瞬間 -

「幻聴ではないわ」

そんな言葉が、耳に入ってきた…それだけならいい…。何も無い空間が割れて紫色の空間から人が出てくるといふ事が無ければ…。

「おわっ…！」

「あら、久しぶりにそんな反応をした人を見たわ…面白くて、少し眠気が飛んだわ♪」

その人は日傘を差して、頭には…何て言うか…えっと…眠る時に被るような帽子を被って、金髪、服は紫色の…洋風な服を着ていた。

思い当たる人がたった一人、俺は知っている。だが、とりあえず…

「…長い間、まともな神経を持った人間を見なかっただけでしょ

…。てか、誰ですか？」

「愚問ね…私は貴方のことはそれなりに知っているし、貴方も私のことをそれなりに知っている…でしょ？」

「…八雲^{やくも}紫^{むらさき}…さんですか。」

八雲 紫 -

神に等しい力と言われる『境界を操る程度の能力』で現代と幻想郷を隔てる結界を張った張本人。

「まあ、その説明は及第点というところね…とりあえず、本題に入らせてもらっわ -」

(…心(?)読まれた…もう、境界を取り除いたのか…てか、本当に在ったのか…『幻想郷』は…。)

「…話をちゃんと聞いてないと、弾幕結界を放つわよ？」

「…スミマセン…」

「貴方、今の日常に飽きてるわよね…?」

「…まあ、s」

「なら、話は早いわ…今すぐ、幻想郷に連れてってあげる。」

「…それは、あ」

「では、1名様ご案内」

言い終わるのを待たずに言い終わると、俺の目の前に境界スキマが生じ、あつという間に吸い込まれてしまった…。

（この吸い込みって何吸引!?!）

耕作君を幻想郷に送った後、眠気がドツと押し寄せてきた…。

（やっぱり…冬に能力を使いすぎたわ…。早く寝ないと…あ…）
そこまで考えて、ある事に気づいた…

（武器…渡すの忘れてた…）

『何とかなる』…そう考えて私は境界の中に入り、すぐに夢の世界へ入っていった…。

第壱話 神隠しの全貌（後書き）

携帯を閉じたら偶然、虫が飛んできたのか家で携帯を開いたら死がいを発見して、吐きそうになりながら死がいを取り除いた…。

次回から幻想入りですb

第貳話 幻想入り初日（前書き）

休日なので、携帯で書き溜めたやつ（ペルソナ3FFが思ったより書けなかった時に、書いた。）を投稿しましたw

幻想入りキャラ紹介

たくち

田口 耕作…

能力についてはネタばれなので、言えません。

高校2年生。ゲーマーだが東方はそれなりにしか知らない。卓球部に所属、よって運動能力についてはそこそこある。

東方の登場キャラを全員、書いてるとキリがないので幻想入りしたキャラの紹介を行うことにします。

第貳話 幻想入り初日

境界に吸い込まれて、落ちているのか横に飛ばされてるのかわからない状態がしばらく続いた…。

「…今更だが、何で俺の前に現れたんだ…？あのスキマ妖怪…。」
今となつては遅すぎる質問事項である…

（まあ、今度聞け…っ！？）

突然、背中に強い衝撃が襲ってきた…どうやら、背中から地面に着地したらしい。

（不…不意打ちすぎる…）

背中の痛みを我慢して、立ち上がるとそこは、森の中だった。

（…………あれ？ここは…？）

周りを見渡すがやはり、森だった…。

（…とりあえず、前か後ろの道を進めば分かるか…）

そう思った瞬間、茂みから毛が生えている…『毛玉』が現れた…。

（毛玉か…多分、大丈夫だな…。）

俺は、そこら辺に落ちている木の枝を拾って構えた。

（先手必勝！）

毛玉に向かって走り出した俺は、フヨフヨ浮いているだけの毛玉を叩き落とそうとした…が、毛玉は唐突に俺に向かって突進をした…。

（…っ！）

毛玉の攻撃に反応できなかった俺は、腹に突進を喰らい、吹き飛ばされた…。

（痛…結構、簡単そうに見えたんだけどな…。）

よろけながら立ち上がり、攻撃に備え、構えた。

毛玉はまた、俺に向かって突進をしてきた。

「卓球部を…なめるなあ！」

そう言い、木の枝を振り下ろした。振り下ろした枝に当たった毛玉

は地面にめり込んだ…。

そんな調子でその後、何度も出てきた毛玉を何体も地面にめり込ませた俺は -

(…何か、強くなった…気がする…)

そんなことを考えながら進んでいると、開けた場所にある小屋が目に入った。

(……………まさか…)

あの死なない人が、居るような気がした瞬間 -
バンッ

「最近、誰も来ないから暇だ…そういうえば、焼鳥屋のb…」

小屋の中から出てきた、銀髪で、赤いチエック柄のオーバーオールと頭に白と赤のリボンで髪を束ねて髪の毛の先にもリボンをつけている人 -

その人と目が合った瞬間 -

「あれ？もしかして、道に迷った方？」

「…まあ、そんな感じですよ…人里つてどの方向に行けば、良いですか？」

「ああ、人里なら貴方の後ろにある道を通って直ぐ行けば着くわよ？」
後ろにある道 -

それは、俺が数多の毛玉を地面にめり込ませた道だった…。

「うわあ…逆方向だったのか…」

「てか、ここに来るまで大丈夫だったの？」

「え、まあ…大丈夫でしたね」

「…ちよつと敬語、止めてくれない？堅苦しいのは苦手なんだよね…。」

「…わかりました。ちよつと待ってください…」

「？」

「……………よし！」

「え、何が『よし！』なの？」

「いや、ちよつと言葉のスイッチを切り替えた。」

「器用なことを…まあいいわ。私は、ふじわらのもじ藤原妹紅…貴方は？」

「田口 耕作だ」

「よし耕作、道案内をしてあげるわ…だけど、その棒つきれじゃ不安だからちよつと待ってて。」

「ああ、わかった」

妹紅は小屋の中に入っていった…しばらくすると、木刀を持って出てきた。

「はい、コレ」

「木刀？」

「そうよ」

「…助かるよ」

「何なの？今の間…」

「いや、妹紅は何で戦うのか一瞬、気になって…」

「私は主に足で戦うわよ？」

「…武器に頼ってる自分が情けなくなってきた…」

「…えつと、何この状況…」

人里へ案内するため、私たちは人里への道を歩いていた…が、いつもなら大量の毛玉がわんさか出るはずなのに、大量の毛玉が地面にめり込んでいた…。

「ああ、襲ってきたから地面に叩き落とした」

「ええー…私、いつも吹っ飛ばしてたんだけど…」

「木の枝で戦ってたから、吹っ飛ばすことが出来なかった…」（木の枝…！？それにしても、地面に深くめり込んでいる…）

そう考えながら歩いているとある事に気づいた。

「…ここら辺にめり込んでる毛玉…浅いわね。」

「それは、俺が小屋に向かいながら、毛玉と戦ってたからだよ。」

「へえ…てことは…」

（外来人が毛玉と戦いまくって、強くなった…ってこと？）

「面白い…」

「え？何が…？」

「ちよつと、人里まで行ったら寺子屋に連れて行くわ。そこに、私の知り合いが仕事で人里にいるから。」

「え、何故！？」

「ちよつと、面白いことを考えてね♪」

「??？」

久々に楽しめると考えると、口がにやけてきた。

俺が、毛玉の大半をめり込ませたおかげで問題なく森を抜けることが出来たと、妹紅は言っていたが…その後が、嫌な予感しかない。（携帯、繋がる…わけないよな…）

念のため、携帯を見てみたが…圏外だった。

迷いの竹林から徒歩で歩き、昼ごろに人里に着いたと思ったら、妹紅に寺子屋に無理やり連れて行かれた。中には青い服で頭に帽子を乗せていてその帽子から何て言うか…何か出てる…。他には、見た目は普通の子供に見える子が5人ほど居る…。

「おい、慧音！」

「あら、妹紅…珍しいわね？貴女がここへ来るなんて」

「ああ、ちよつと面白い奴を見つけてね」

「そーなのかー」

「てことは、また久しぶりにアレをするのね？」

「ま、そういうことだ」と、言うわけで…」

「貴男は、食べていい人間？」

後ろの方に、赤いリボンに金髪で、黒い服を着た子供が俺にそう聞いてきた…。

「ルーミア、食べちゃ駄目よ…これから、用事があるんだから」
「そーなのかー」

「じゃあ、耕作…外へ行こうか？」

「あ、ああ…」

寺子屋の外に生徒が遊ぶような場所があり、ふと目立たないところに目を向けると…何かが爆発したようなクレーターがあった。

「…で、何をするんだ？」

「何、難しい事じゃないよ。…私と戦うだけさ」

「え…」

「ちなみに、拒否権はない…ここでは、外の世界の法律なんて関係無い…ただ、戦って生きるか、戦わずに死ぬかだ！」

俺は妹紅の言った言葉に、違和感を感じた…。

第貳話 幻想入り初日（後書き）

後書き…何を書けばいいのかわからなくなってしまった…。

O T L

てか、前書きすらあれでいいのかわからない…。

ちなみに、里の位置も文章的に、たまに変な所にあるかもしれないです…（いわゆる矛盾？）

次回、緋想天的な弾幕バトルです！

先に、言っておきます。こういうスペルの使い方でもいいのか？って
いう戦闘になると思います…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8901o/>

東方幻想記

2010年11月20日14時33分発行